

8. 《富士山噴火が荘園化を加速！・・・新説》

荘園の増加の背景として、歴史学者では論じられていないことがあります。災害が多発する日本において、朝廷から授けられた口分田は、そのまま維持はできません。河川の氾濫により、灌漑水利施設や口分田は、たびたび流失や埋没して破壊されるからです。

その復旧が、国司側でなされれば口分田（名田）として存続するでしょうが、地元豪族によってなされたところも多いと考えます。今で言うPPP（**public-private partnership**）手法により災害復旧を行い、それが荘園化に繋がっていったと考える方が自然です。

東国は、この水害に加え、富士山と浅間山の噴火が荘園化と地域豪族形成に決定的な影響を与えたと考えます。まずは、平安初期の噴火により起こったと想定されるシナリオを紹介。それは、武家政権の中樞が、武蔵国ではなく相模国の鎌倉となった遠因だと思うからです。

平安遷都の6年後の800年（延暦19）、そして864年（貞観6）に、富士山が噴火。（注1）これらの噴火により、大量の火山灰が相模国に降った。公領地は、降灰により埋没し、また大雨により泥流化して水利施設が破壊される事態を迎えた。

国司側が復旧に手をこまねいている間に、地域豪族たちは独自に耕地復旧して私領地化していった。その過程で、力のある有力な地域豪族が形成された。私領地は、国税を免れるため中央貴族や神社に寄進されて荘園となった、というシナリオです。

ちなみに、火山灰は、長期間かけて海に流れ下り、ラグーン（注2）を形成して沿岸域の陸化を促進します。こうして12世紀初頭に、地域豪族が湘南の藤沢市あたりを開拓し、伊勢神宮に寄進しました。これが、大庭御厨（おおばみくりや：注3）で、この荘園の帰属を巡る紛争が、鎌倉幕府成立の直接原因となりました。

注1：富士山は、歴史時代に16回の噴火が記録されていて、そのうち10回が平安時代です。

800年（延暦19）の延暦噴火では、大量の降灰があり、足柄峠は通行不能となって代わりに箱根路が整備されました。火山爆発指数（VEI）は、やや大規模とランクされる3でした。

また864年（貞観6）の貞観噴火では、溶岩流が北側斜面を流下して麓の大きな湖に流れ込み、西湖と精進湖に分断したことで有名です。このときのマグマ噴出量は1.2DREkm³【DRF＝マグマ換算体積】でした。

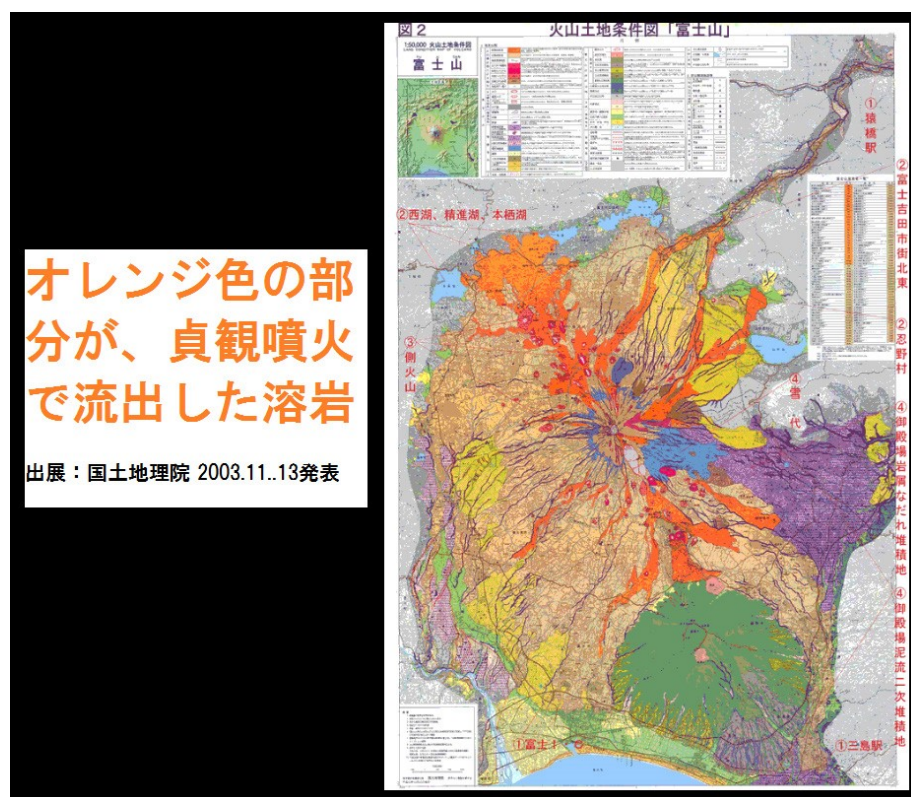
この貞観噴火の5年後、東北を大規模な地震が襲います。貞観時代の天皇の一人が、清和天皇であり、その子孫が源氏となって武家政権を樹立します。

注2：海岸沿いに発達する砂州

注3：鎌倉景政（平安後期の武士、桓武平氏の流れ）が、1104～6年（長治年間）、海岸沿い（神奈川県藤沢市）を開発し、1116年（永久4）頃、伊勢神宮に寄進しています。

写真は、①富士山貞観噴火の溶岩、②大庭御厨の位置（Y a h o o 地図の背景に位置を示す）

①



②

